

センター がひん



ひと言

調査・研究のセンターが必要である！

清水 貞夫（センター運営委員）

要求運動を進めるとき、要求の根拠となるデータがなければ、その要求は論拠薄弱とされ、要求は受け止められないであろう。そして、要求に根拠を与える迫力を持たせるには、調査・研究は不可欠である。加えて、そうした調査・研究は、ナショナルなものであるより、ローカルな現場的なものであることで強みを発揮する。

不登校や中途退学は、今日の教育において、最大の排除問題であるが、そうした問題が、どの学校でも同じように生起しているかという点、そうではない。全国統計では、それが見えない。そのため、不登校や中途退学が、不登校児や中途退学生徒の問題であるかのように理解されてしまう。その議論は、不登校児や中途退学生徒の個人責任論へと発展してしまう。特別支援教育にかかわる問題も同じである。特別支援教育のデータは全国統計で実態をつかむことはできる。しかし、その実態は都道府県や市町村単位で差異があり、加えて学校単位で差異がある。それをデータとして集積することで要求運動の力になる。

要求運動は、データなしで展開できないとは必ずしも言い切れないが、それは借り物の要求に脱してしまうことになる。実感を伴う要求運動のためには、ローカルな調査・研究センターが必要である。

目次

ひと言	清水 貞夫	1
特集 教育の現場はどうあればよいか		
1、座談会 若い教師 現場の今を語る	鈴木 草太 丸山 美穂 村田 弘美 山下 京子 吉田 淳子	2
2、座談会を読んでの感想	吉武 洋子 花島 伸行 佐々木祐一 石井山竜平 千葉 建夫 秋山美智子	9
3、こんな学校 こんな教師に 明日、子どもたちと会うのが楽しみです —信頼、そして授業づくりを楽しむ学校—	高橋 達郎	13
教室から 一思い出す子どもたち 子ども同士がかかわること	高橋 三代	16
私と歌 音楽と平和	堀尾 輝久	18
本の紹介	熊谷富代子	20
カント読書会って、どんなところ？	清岡 修	21
この頃 思うこと 先生方、大丈夫かな	土岐 満子	22
会員の近況 センターのうごき	藤田 康郎 小國紀代美	24 24
本の紹介	保	24

特集 教育の現場はどうあればよいか

マスコミで教育現場にかかわる問題が頻繁に取り上げられます。その一つひとつは看過できないものであり、それらが起るたびに当該教育委員会は頭を下げ、職員を引き締めを約束しますが、いこうに変わらないのはどうしてでしょう。それが子どもにまで関係しているだろうことを想像すると、規律の強化だけで解決できないものがあるのではないか。それは何か……。みんなで考えてみる必要があると思います、今回の特集を組みました。その内容は、1、座談会「若い教師現場の今を語る」、2、座談会を読んでの感想、3、「こんな学校 こんな教師に」になります。感想やご意見を、フアクスでもホームページの「みんなの声」でも結構ですので、ぜひお寄せください。

1、座談会 若い教師 現場の今を語る

座談会出席者

鈴木 草 太さん（教師2年目）
丸山 美穂さん（講師）
村田 弘美さん（教師3年目）
山下 京子さん（教師1年目）
吉田 淳子さん（教師7年目）
聞き手（春日、熊谷、清岡）

教職への動機

春日 先ずは、教職への動機を聞かせてくれますか。簡単に結構です。

山下 私は特別支援教育に関わりたくて、教員採用試験を受けました。小学生のときに特別支援学級の子が楽しそうに学校菜園で活動をしているのを見て、いいなという思いがあったんです。でも採用試験の面接で、まずは普通学校で

できないと特別支援の方にはいけないと言われて、小学校で働いています。

吉田 将来、何にというのはずっと迷っていて、その中の一つに教師という選択肢もあったんです。高校時代に、ハンドボールで膝の靭帯を損傷して、しばらくリハビリをしていました。それで理学療法士の道にすすもうと思って、受験したけど落ちてしまつて。もともと子どもは好きだったので、足が不自由になったときに障害について考え始めて、特別支援に進んで、子どもが持っているものは大きいなと思つて、先生になろうと決意しました。

村田 小学校の時から先生になりたいと思っていました。なぜかつていうと、学校が好きだったし、勝手に自分には向いているんじゃないかなと子どもながらに思っていました。進路選択では、教職か介護なども考えました。でも、地元には宮教大もあるし、先生かなと思つて大学に入りました。大学に入ると、まわりもみんな先生をめざしているのので一緒にという感じで今に至つてます。

鈴木 小・中の時にはあまり将来のことは考えていなかった。

中学校のときとか学校が好きだったので、担任の先生がすごくいい先生で、こういう先生になれたらいいなと思った。本当は社会の中学校の先生になりたかったんですけど、実習で小学校に行つて小学校もおもしろいと思つて、採用試験も小学校で受験しました。

丸山 私は皆さんとは違つた道を歩んでいて、大学も東北学院大の法学部を出て、大学入つたときには公務員になりたくて、法律の勉強をしていました。大学時代に高校の卒業生でつくっている合唱のサークルに入つて、小学校に行つたり老人ホームに行つたりして、子どもとじかに接する機会があつたんです。その中で、子どもと関われる現場で働いてみたいなという漠然とした憧れができました。でも、卒業したときは一般の会社に就職して……、3年くらい経つてみたら、大学時代の憧れとか情熱がムクムクと出てきてしまつて、思ひたつて講師になつたんです。それで、この間教授を受けています。今もどうして学校の先生になりたいのかつて、明確に答は出ないんです。

教師としての喜び

春日 教員になり実際これまでの仕事で、「よかつたな」というようなことあると思ひますが、その1つ、2つを教えてください。

吉田 この間学習発表会が終わつたばかりですけど、自分の頭の中でこういうふう終わるといふイメージが持てないままスタートして、学年の先生たちと四苦八苦しなから徐々に創り変えてきて、子どももすごく喜んで、やった！という達成感が見られたときとか、自分たちも子どもと一緒に何か成功できたんだなということを実感したときですね。

あとは、今日は伝わつていて、わかつてくれているとい

う反応があつたときや、喧嘩をしていた子たちが仲直りをしていてのを見たときとか、いっぱいあります。

村田 私も行事のたびに、学校いいなと思ひます。何がいかと言つと、子どもたちが一生懸命なところとか、いろんな先生たちが協力して創り上げて成功したときとかです。あとは音楽朝会で全校で歌をうたつているときも、しみじみといいなと思う。授業はなかなかないんですけど、すぐ読みとりをがんばつて、最後の感想で「今回はがんばつて、私もおもしろかつた」みたいな子どものノートを見ると、うまく行かなかつたところもあつたけど、よかつたなと思ひますね。でも、なかなかそういう授業ないんですけど。

鈴木 音楽は苦手でピアノもあまり弾けないんですけど、歌うのが好きなので、別に單元には入つていないんですが、普段の授業で合唱を毎回ほぼやつています。それで、子どもたちが笑顔で歌つていっているのを指揮しながら見ていっているなと思う。あと授業の單元が終わつた後の感想などで、*「わかなかつたけど、こういうふう教えてもらつてわかるようになった」*とか、細かく具体的に書いてくれる子がいるんですけど、そういうのをみるとうれしくなります。

丸山 「わかつた！」という言葉を聞くとすごくうれしいし、授業で生き生きと発表しているのを見ると、わけもわからずすごくうれしく感じます。

山下 悲惨な授業ばかりで、こんな授業を毎日してても受けてくれている子どもたちにちよつと感謝しているんです。うまく行かなくて怒つてばかりいて、どう接したり対応したらいいのか難しくてうまく行かないなあと思つていた子に、ある日突然、「来年も担任してね」と言われたときに、泣きそうになりました。

職場をどう感じているか

春日 教職を辞めたいなんて思っている人は誰もいないようですね。いろいろ今の教育現場は厳しいとか、非常に辛いとかそういう話をいっぱい聞きます。私の頃は、だいたい5時ごろになると帰れた。それから放課後はみんなで野球をやったり、バレーボールをしたり、そういうことがいっぱいあった。今も時々、サークルの学習会に参加したりするんだけど、口を揃えて「大変だ」と言う。私が現職の頃はサークルは6時ごろには全員揃っていたが、今は揃うのが7時半頃かな。7時半になってもこれない人もいる。慌てて8時ごろ来たりとか。大変なんだなと思う。今の仕事をどう感じたり思っているのか、自由に話してもらえますか。吉田さんは7年目ということだけど、どうですか。

吉田 初任のときは、仕事がいっぱいあるのはわかるんですが順番も立てられないし、何が大事なのかもわからない。だから、とりあえず目の前にあるものをどんどん片づけていって、いつ終わるんだろうみたいな感じでした。そのうえ初任研があつて、日々レポートに追われていたような気がしました。センターに出すものも月1回ぐらいあつて、そういうレポートを書いて、さらに校内研修の感想みたいなものもあつた。それを週末にやる感じでした。そんななかですから、とりあえず明日の授業でした。今日を顧みず、明日の授業しかやれないみたいな、そんな感じが続いていったように思います。

7年経ってみると、なんとなく順序立てることができて、優先順位がつけられるようになってきて、時間的にゆとりが生まれてきているかなあ。今の学校は雰囲気がいいんです。なんでも学校で起こったことを全部話して帰れるという雰囲気がある。帰ってから一人で悩む時間とか、一人で抱

えて持つて帰つてそのことが頭から抜けなくて何も手につかないというのは少なくなりました。いろいろぼやきながら仕事できるのはいいなと感じています。

山下 今の話は、とても共感できます。本当に目の前のごく精神的にも大変です。教師という仕事は人間的な職業だというイメージがあつたんですけど、実際は思ったよりそうじゃなくて、教員を楽ししいと思える段階ではないです。同じ年代の人が職場にいないので、なんでも相談できる年の近い人がいてくれたらいいなと思います。教育実習では1クラスに3人一緒に悩みがあつてもそれを話したりできたんですけど、職場に入ったら1人の作業で、相談するのも皆さんに負担になるかなと思うとあんまりできないんです。

熊谷 私が新任の頃は、同じ年度の採用が結構いたので、研修会とかでだんだん知り合いになつて、一緒に学習会やろうとか、一緒に遊びに行こうとか、同じ年度採用の人たちで繋がりができた。一昨年私の学校に来た新任の人は、とてもそういう繋がりをつくる余裕はないだろうなと感じた。朝早く来て、夜遅く帰って、もう日曜日は倒れて寝てますというのを聞いた。同じ学校にいても、同じ年代とかが同じ年度採用の人たちで会つて交流できるとまだ救われるんだけどね。そういうこともできない感じなの。

山下 初任研で友だちになつてメールアドレスとか交換しても、会う時間とか遊ぶ時間はつくれない。この仕事について一番思うのは、仕事とプライベートの境目が無いということです。24時間仕事のことを考えていて、仕事以外のことをするのがちよつと怖い。常に、頭の中は次はどうしようかと考えている。

熊谷 新任の人は、研修が本当に大変だなと思う。皆さんの話を聞いて、毎日苦勞とか辛いことがあっても、達成感というか喜びがあるから続けられているところを私も含め教師はあるよなと思います。今彼女はちよつと辛いと思っているんだろうけど、いっぱいそういう時間をつくり出せるような環境だったら、もつと楽しく仕事ができるんじゃないかな。それを阻害している一つが初任研のレポートじゃないかと思う。私が初任のときは、レポートなんてなかった。休み時間のたびに子どもと遊んでいたし、日曜日は子どもと遊びに出かけたしね。本当にエネルギーがいっぱい残っていた。すごく自由だった。

さつき教職の動機で、担任の先生がすごくいい先生だったといわれていたけど、どんな先生だったの？

鈴木 音楽の女の先生で、中学2・3年で担任をしてもらったんです。かなりサバサバしている先生ですけど、友だちのこととか勉強のこととか進路のことを相談したりするときは、とても親身になって、いつでも相談に乗ってくれたんです。それで、とても楽しく過ごすことができた。だからたぶん音楽も好きなんだと思います。

熊谷 いつでも相談に乗ってくれるっていうけど、先生たちはいつでも子どもたちの相談にのつてあげる時間はあるの。

吉田 じっくり聞くということはないですね。

鈴木 あんまり、親身な相談を持ちかけられることはないです。困り事とか喧嘩のこととか。中学校だとかかなり深刻に悩んだりするのもかもしれないけど。去年も今年もないです。

熊谷 ないんだ。先生が忙しそうにしているからじゃないかな。

春日 休み時間とか昼休みとか、子どもが寄ってくるような雰囲気は持っているの。

村田 私は、基本的に自分が次の授業に向けて気持ちをしりセットしたいので、職員室に降りていくことが多いです。

丸山 私は、3、4年生の算数少人数を担当しているんですけど、子どもたちを全員見るとなると、前の授業でわからないことがあった子をずっと見てあげたいけど、それもかなわず、中途半端に担任の先生のところに戻ってしまうことがあります。ぎりぎりまでその子のことを見ると、どこかで区切らないといけないなと思って、その子をそのまま「ここわからないみたい」と帰して、私は職員室に行くパターンが多いです。

教材研究の時間はどのように

熊谷 教材研究のことをぜひ聞きたいと思っていたんだけど、どのぐらい教材研究とかできてるのかしら。できてなければ、どうカバーしてるのかも聞いてみたい。

鈴木 教材研究は、先ず教科書を見て、ここでこれ使ったらいいかなとか、これ拡大しておいたらいいかとか一応授業を思い浮かべて、それから指導書を見て真似できるところはしています。そうすると、指導書とは全然違うことをやっているということもあるんですけど。すごい時間をかけてはできていないのが現状です。教科書を見て、後で指導書を見て授業を頭の中でつくってやるというのが、今の



教材研究の実態です。

村田 その日暮らしなので、ダメなんです。私3年目で今の小学校は最後なんです。この間5年生、1年生と来て、ずっとその日暮らしだったんですね。5年生、1年生とうまく行かないところもあったから、最後の1年は教材研究もがんばって気合い入れるぞと思ったんですけど。でも実際は、いま子どもたちは4時に帰るんですけど、その後ノートとかスキルとか、子どもにすぐに返さなければいけないものをみて、テストの丸つけをして、そこから教材研究となると真つ暗で6時とかになっっている。でも、とりあえず明日の国語と算数は押さえてみたいな感じで、音楽なんかはその日に階段を上がりながら、こここうやって、ああやってみたいな感じです。それで授業をやりながら、あれ用意すればよかったとかもつとこうすればよかったと思うんです。

(ああ、子どもわかってないなあ)とか思いながら授業が終わるということの繰り返しなんですよね。もつと授業に力を入れたんですけど、やっぱり夜は寝たいし、寝ないと次の日がもたないしと思うと、本当にその日暮らしで指導書だけみてやって、後悔というのが毎日です。

清岡 4時に子どもたちが帰って、すぐに丸つけとかできればいいけど、実際は会議とかが入って、5時とか6時までいろいろあつて、その後ということもあるわけですよ。

春日 普通は何時ごろ帰るの。

村田 私は、7時ぐらいかな。去年はすごく早かったんですけど。学年の先生が残っていると、一緒に残ってやつちゃいますね。別に強制されてやっていると、一緒に残ってやつちゃいますね。別に強制されてやっていると、一緒に残ってやつちゃいますね。別に強制されてやっていると、一緒に残ってやつちゃいますね。

山下 教材研究はやろうと思つても、学校にある道具とか、どこに何があるかからしてわからないので、理科の実験とかも事前に実験して確かめておかないと思つてんですけど、ずるずるそれが遅くなつてしまふ。だから、自信のないところはできなくて、時間割をかなり変えて、実験のところを後回しにしていたりします。

春日 村田さん流に言えば、だいたい放課後の時間はこういう感じなの。それで何時ごろ帰っているの。

山下 保護者への対応がすごく時間かかっています。学校には、10時ぐらいまでいる。

春日 早く帰れとは言われないの？

山下 校長先生とかには言われるんですけど。学校があいているかぎりは学校にいて、遅いときには日付が変わつたり。

熊谷 それに、週2回授業の略案を必ず提出しなきゃいけないんですよ。

山下 はい、初任研で。

清岡 10時に帰ったら、家では仕事はしたくないですよ。

山下 仕事はしたくないですけど、授業ができないのでとりあえずパソコンつけたりして、でも途中で意識を失つて朝になつていてみたいな感じですね。

熊谷 過酷な生活だね。ちなみに私が前いた学校では、初任の人の相談相手をしている暇がある人はいなかったね。指導教官が来たときぐらいが初任の人の話を聞いてあげられるぐらいだね。もちろん、声はかけるよ。「がんばってる?」「大丈夫?」「先生のクラスの子どもこんなことしてたよ」とか。でも、そこをカバーしてあげるぐらいの余力が他の人にあつたかというとなかった。そういう経験をしているから、今現場は厳しいと言つてしまふ。

春日 吉田さんは、2校目だね。学校によって、違いは感じ

ますか。あなたは、今はいいと言ったでしょ。

吉田 先生たちの雰囲気がよくいい。こちらから発信しなくても、それを感じとって声かけてくれる先生もすごく多いし、私がどうのこうのというのではなくて、他の先生の話を聞いていても同じ悩みを抱えているんだと思うだけで、ちよつとホツとするところもある。みんな思いを口にして、自分の思い通りにやらせてくれるというところがありがたいなあと思います。

熊谷 思い通りにやらせてくれるんだ。

吉田 まあ今の学校で3年経験して、自分は何をやりたいかというのが見えてきたからかもしれないですけど。ここはこうやってみようとか。次は、これをやってみたいというものが生まれたからかもしれないです。

熊谷 やりたいことを持つていてもできない学校も多いからね。学年のしぼりとか。

吉田 あまりそういうところに気は使わなくてできていますね。

熊谷 そういう学校っていいよね。今どき、めずらしい。こういう学校だったらいいなという一つの学校のイメージだよね。

よりよい仕事をするための願い

春日 そろそろ最後になります、学校のここがこうなったらもつといいなということあつたら聞かせてください。

吉田 今は高学年担任なので6時間の日がすごく多くて、3時55分に「さよなら」をして4時から会議という、子どもとこれだけは話して帰りたいとか、ここが解決しないと明日こじれそうだなとか、そういう問題も時間に押されながら聞いたりするから、子どもの思いをちゃんと聞けな

ったり、伝わらなかつたりとかする。

丸山 私も時間がほしいのは同じです。いま算数のカリキュラムを立てているんですけど、学習指導要領の改訂で大変内容が増えてもあつて、本当に1時間1時間刻みで、ひとつ予定がずれると終わらない。3月末まで立ててみたんですけど、余裕が2時間しかなくて、不安とたかいたながらいる状態です。ですから、吉田さんのように子どもとの時間もほしいし、逆に増えた内容を子どもたちと深める時間もほしいです。

鈴木 去年4年生担任だったんですが、「さよなら」をして4時、会議がなかったとして退勤時間まで丸つけをして、教材研究をして、事務整理をして、明日の授業の準備をしてというのは、確実に無理です。丸つけを減らすためには休み時間に丸つけをする。となると、子どもと遊ぶ時間はない。どうしても、これは残業しかないと思ってる。7時に帰るか、そういうもんだとしか思っていなかった。内容が当たり前だと思つていた。指導要領の移行で、学習内容と授業時数が増えて、去年も終わらない終わらないとすごく大変だった。学ぶことも多いし、難しくなってる。どんどん増えてきたなと思う。それを決まった時数の中に詰めなくてはいけない。これまで以上に大変になっていくんだろうなと思います。

村田 校務分掌というのがありますよね。クラス担任をしていれば、その仕事は当然やらなくてはいけません。私は、たいた校務分掌は持つていないのでいいんですけど、校務の仕事もとなると、クラスのことだつてできないんじゃないかと思う。私と組んでいる先生は情報担当で、その仕事も持つているんです。パソコンとか一手に引き受けているんですけど、この先生はいつクラスのことをやるのかな

って思う。私は自分のことで精一杯で、ろくに校務分掌まで手が回らない。校務分掌の方をすくぐらんぼううと思ったら、クラスのこととは後回しにならざるを得ない。そう考えると、5時になんて絶対に帰れない。仕事は5時までなんですけど、明らかに帰ることはできない。私は、家と学校の時間はわけて、家にまで学校のことを持ち込みたくはないんです。でも5時に帰ろうと思ったら、家に仕事を持って帰らざるを得ない。そこは変だなと思う。休憩時間もあるけど、誰が休憩しているんだらうと思う。休憩したら帰れない。

熊谷 休憩とらないでしょ。

丸山 いつからいつまでが休憩なの？

村田 仕事しながらお茶飲んだりはしているけど、すべて放つておいて休憩というのはないですね。

熊谷 職場を離れての休憩なんてとれないものね。そういう特殊性が教師の仕事にはあるから、長期休業中に休めたりとかそういうことをしていたけど、今はそれもなくなったでしょ。たいていの学校は夏休みも普通勤務でしょ。

山下 クラスの子ども40人なんですけど、1クラスの人数を減らしてほしい。まったく現場のことがわからないということがわかった。大学で習わないことが多すぎて、行事とか、授業もどうやればいいのか本当にわからなくて、1年間は担任を持たないで学校のことをとりあえず知るといいう期間があったら、もつとわかつたうえでできるのかなと。

吉田 他の先生の授業とかみたりは？

山下 見ていいよとは言われるんですけど、見に行く時間もないというか。

熊谷 他の先生が見に来ってくれることは？ 私が若いときにはあったけど。自分の教室の授業は自習にしてね。そうい

うのが結構あった。私は、職場の中で育ってきたと思う。

清岡 先日、自殺した新任の先生のことをテレビで特集していて、その中でほかの若い先生が他人事ではないとコメントしていたのが印象的だった。それほどまでに今の学校は大変になってきていると感じたりしますか。

山下 私は県外の大学を出るので、友だちはそつちで教員をしている人が多いんですけど、すでに2人が鬱になって、一人は辞めて、一人は休職してます。そういう友だちと連絡をとるとすごく共感できることが多くて、本当に他人事じゃないなと思います。次は私なのかなと思ったりします。鬱で病院に行っている友だちから教えてもらったのが、学校で鬱になるのは「子どものこと」「保護者のこと」「同僚のこと」、どれかで悩んでたら、その可能性はあると言われました。

熊谷 自分のことを力不足だと感じているようだけど、1人で責任を感じたりしないで、悩んでいたりで困っていることをどんどんまわりの先生に言っつて、自分のはけ口をつくつていかなないと大変だよ。話を聞いていてそう思うな。

春日 それでは約束の時間が過ぎたので終わりにします。みなさん、ありがとうございました。



2、座談会を読んだの感想

昔の子どもから、今の先生に

吉武 洋子

私が小学生だったのはもう50年以上昔、私が教師だったのは40年近く昔、そして私が小学生の親だったのは20数年前になります。小学校低学年の時に、担任教師の「いじめ」に苦しみ不登校になりかかり、また同じように苦しんだ娘を持つ私は、小学校教師とは、子どもが人生の入り口で出会うとても大きな存在であり、最も大切な職業の一つだと思っています。今は否定されているようですが、私は教師とは「聖職」であり、社会的に高く評価され、処遇されるべき職業だと考えています。

今回の「若い教師 現場の今を語る」座談会からは、若い先生方が、子どもが好きで、子どもが喜んでくれるのが教師の「やりがい」と感じておられる事がよく伝わってきた反面、その子どもの相手をする時間（教材準備も含め）が取れ

ない悩みや嘆き、教師同士切磋琢磨して成長したいという思いも伝わってきました。ただ欲を言えば、現状をどう変えれば子どもとしっかり向き合える時間がとれるのか、それに関して、親を含む多くのOB、OGに何を期待するのか等々、もう少し突っ込んだ議論をしていただきたかったと思います。

50年前、団塊世代の私の学級は50人、勿論担任は一人でした。それでも先生に休み時間や放課後によく遊んでもらった記憶がありません。なぜ今そんなにもゆとりがないのか、30人学級にすればいいのか、学校行事や校務分掌を減らせばいいのか、初任者研修内容の負担を軽減すればいいのか等々。また職員室の問題はどうなのでしょう。教師同士の助け合いや切磋琢磨がうまくできないという現状は、単にお互いの時間的ゆとりのなさ故なのか、管理職の問題が大きいのかも。また教師自身の意識の変化なども突っ込んで話し合える機会があれば面白いとも思いました。最後に私の好きな論語を援用して、昔の子供から今の先生にエールを送ります。「徳不孤。必有鄰」（徳は孤ならず、必ず隣あり）一所懸命やっている人は孤独ではありません、必ず認めて一緒にやる仲間がいます。

（あいこっぴ理事長）

ひとりで苦勞を抱え込まずに

花島 伸行

さまざまな抱負を抱いて「教員」になった。しかし、現場に出れば、

子どもと向き合う余裕をなかなか持てない。そんな自分にストレス

を感じながら「教員」生活を送る。自己肯定感を持ってないまま……。「教員」を「児童福祉施設の職員」や「親」と置き換えても全く不思議ではない。現に、私は、そうした生の声（自分の内なる声を含む）をたくさん聴いている。

こんな現実を前にして思うことは、子どもと向き合う大人同士が、一人で苦勞を抱え込まずに支え合うべきだということだ。「教員」はスーパーマンやスーパーウーマンではないし、教育の目的は子どもをスーパーな存在に育てることではない。困ったときに、誰の力を借りたらよいか。支えてもらえる他人と普段からどれだけつながっているか。こうした視点こそが、真の生活力を身につけるために必要なはずである。人間誰しも、受け容れられて自己肯定感が育つ。自己肯定感が弱いと、助けを求める気力も湧かず、周囲からの支援に対しても拒否的になりがちである。

弁護士は、付添人（大人の刑事事件で言えば、おおよそ弁護人に相当するが、その活動のメインは、非行原因を克服するための働きかけと、環境調整である。）として、いわゆる非行少年と接する機会が多い。私自身、付添人活動がしたくて弁護士になった。これまで出

会った少年の大半は、支えてほしいとき、話を聞いてほしいときに適切に関わってくれる大人に恵まれなかった。最たる例は、保護者から虐待を受けていた子どもが、生きるためにやむを得ず万引きを繰り返すような場合である。こうした子どもたちでも、本気で関わる大人次第では、劇的に変化成長し、自尊心を少しずつ身につけながら自立してゆく。その姿が、私に元気をくれる。

親に対する「子育て支援」は、今や社会全体の課題となった。子どもと向き合う親自身を支援する

いろんな

おしゃべりをしたら・・・

ことは、社会全体が子どもを育てることにつながる。虐待や非行の防止策としても大変有効なのである。これと同時に、教員や学校に対する支援にも力点を置くべきではないか。地域が、学校や教員を支えることを通じて、子どもが育つ環境を保障するのである。若く悩める教員のみならずには、一人の大人として子どもと向き合う楽しさや喜びを分かち合える人と、ぜひ出会ってほしい。いつの日か、一緒にしましょう。

（仙台弁護士会
子どもの権利委員会委員長

佐々木 祐 一

実は、つい1ヶ月前の、私たちが学び合っているサークルの研究例会でも、ちょうど、「初任の1年間を振り返って」という報告を若い先生がしてくれたばかりで、その時の報告と重ね合わせて、これを読ませていただいたところです。

座談会を読んで、ここに参加された若い先生方一人ひとりが、教師になる夢や願いを持ってこの道

に進んできたこと、そして今も、初任研や仕事の大変さの中にあっても、教師という仕事をやめたいと思っていないことに、まず、安堵しました。と同時に、今日の若い先生方が置かれている困難さが（同時に、そこには、私たち経験者層にも共通するものもあります）様々に語られていると思いました。とりわけ、初任研の負担は驚くほ

ど大きいということや、また、悩みや相談が、時間的にもなかなかできないでいるということ。その点は、サークルの仲間の報告にも共通していました。

学校現場の困難な状況を変えて行くにはたくさん課題があり、そのための努力は続けていかなければなりません。が、何よりも、若い先生方が精神的に追い込まれたり、仕事を辞めたいと思ったりせず、これからも喜びを持ってこの道を歩んでいけるためには、せめて何が必要なんだろうかと考えてみました。

限られた紙数ですので、1つ2つのことだけを伝えたいと思います。

サークルの仲間の報告から感じた大きな問題の1つは、初任研での研修や「指導」では、必要以上により完璧な教師であることを求められてはいないかということでした。私たちもたくさん失敗の積み重ねの中で成長してきました。教師という仕事は、経験がどれほど積まれても学び続けなければ立ちゆかない仕事です。ですから、教師としての力量形成をもっとゆとりしていいことを、まずは、知ってもらいたいと思いま



した。

そして、何よりも職場で、さらには校外のたくさん仲間とも、構えずにもつといるおしゃべりをしたらいいと思いました。若いのですから、先輩にも遠慮せず、何でも聞いたり、相談したりしたいと思えます。頼られて、いやな人間はいません。自分から、心を開いて話してみてもいいでしょう。話す中で、悩みの意味や深さ、解決の見通しや仕事の明日が少しずつ見えてくると思うからです。私たちも、若い先生方に、もっと具体的な援助をできるだけ提供していかなければならないとあらためて感じました。

（石巻・大川小

学校で教員は育っているのか

石井山 竜 平

私たち、大学教員の世界では、採用される前段階で「教える」ためのトレーニングをほとんどの者がくぐっていません。教員の公募においても、審査で問われているのは、あくまで専門領域で通用する論文を書く力量であり、教育者としての資質や力量が正面から問われることは極めて乏しいのが実態です。

ですので私自身、教員になりたいの時は、学生になめられたくないとの思いが先走りながらも、授業も今よりずっと下手で、空回りを繰り返していました。卒業式を迎えるたびに、彼・彼女らに満足してもらえぬ学びを提供できていないことが申し訳なく、情けなく、悔し涙を流してばかりだった時期もあります。

しかし、今にして思えば、そうした過程が不可欠だったと思いません。最初は未熟であることは避けられないことであって、自分の足

りなきに向き合い、そのときでできる精一杯を試すことを幾重にも重ねていく。そうして教員は育つ。ですから私は、これまで出会った学生さんたちには、自分がまだ育ち切れてなかった懺悔と、自らを育てるための気づきをもたらった感謝が入り交じった思いでいます。

しかしいまは、大学も、そしておそらく小、中、高等学校も、最初から未熟であることが許されない。その結果、教員が職場での経験を経ながら、教員としての力量をあげていく、子どもたちにより通用する人格に育っていく、そうした道筋が、足りてないところのみを浮き彫りにするような評価が入り込むなか、けずりとられていく。

そうした環境では、各教員の心が折れないように「守る」配慮も大事ですけど、それ以上にいま真に求められているのは、教育者としての力量と人格を高めやすい職場環境をいかに「つくる」かとい

うことであって、それを大胆に、戦略的に組み立てていく、そのところこそが追求されるべき時期ではないかと思えます。

こうした観点から私が注目し、大いに支持しているのが、近頃の和歌山大学（山本健慈学長）の姿勢と取り組みです。和歌山大学では、「教職員の人生を支援する」「それぞれの個性を生かし、相互の承

認、敬意ある人間関係のある職場をつくる」ということを目標に掲げ、それを具現化する諸改革に取り組んでいます。

問題は、教育機関があえてこうした姿勢をもって取り組んでいることを支持できる民意がいかに形成されるか、ということなんですよ。ね。

（東北大学大学院教育学科准教授

子どもの成長に

喜びを感じよう

千葉 建 夫

若い教師のみなさんが、教師の道を選んだ動機に、学校が好きだったこと、いい担任の先生に出会ったことなどをあげていますが、今教えている子どもをみつめるまなざしがいなのはそうした体験があるからなのでしょう。子どもの心と共感できる柔らかな感性は教師にとっていつもなければいけな

てきます。何年か過ぎると、子どもの悪い面が大変気になってきて、何とかいい子にしなければと思うようになり、そのうちいい子になるのが生きがいのように思えてきます。めざす子ども像を掲げる学校の教育活動が知らず知らず意識を変えていくのです。

い大切なものだと思えます。人間はよさも悪さもあわせ持っているものなのですが、たいへん不思議なことに、先生といわれて子どもの前に立つうちに、このあたりまえの事実が見えなくなっ

は、悩みを語り合える同僚やサークルの仲間でした。児童文学の多くの作品は、子どもが悪さをし失敗しながら育つ姿を描いています。子どもを競わせ知識をつめこむ授業は、子どもを荒れさせます



が、一緒にものを考え追求しあう授業は子どもを連帯させ優しい子どもにするのでした。人間が長い苦闘のなかでつくりあげた文化は不思議な力をもっていて、それを教材として学ぶとき、悪いといわれる子ほど豊かな感情を持って生き生きと学ぶ姿をみせてくれました。

学校で子どもが過ごす時間の多くは授業の中です。その授業で、先生の授業はよくわかり、大事な発見がある、と信頼してもらえ

ような授業をしたいといつも思うようになりました。子どもの心に共感しその可能性を育てたいという新任のころの思いを実現するためにはどうしても必要なことから思ったからです。

座談会で語られる今の学校は、私の現職のときとあまりにも違うので驚くばかりです。でも考えてみるといつの時代でも厳しさと困難さがありました。その中で子どもの成長と発達に喜びを感じ、教育の仕事をやりに続けてきた教師た

若い先生方へ ～自分を大切に～

秋山 美智子

ちがいました。その先輩教師たちに学んだことは、おかしきことはおかしいと言える少しだけの勇氣を持つこと、それを語りあう仲間を持つこと、そして、その場しのぎでない本物の勉強をやり続けていくということでした。学び続けているうちに、私は、厳しく見える現実も知恵と工夫しだいで少しずつ動かせるものだと思がついたのです。

(元小学校教師)

若い先生方が現場で苦闘している様子がしみじみと伝わって来ます。よれよれになって寝るのが一杯の毎日、夢の中にも仕事が出て来て、自分の大声で目が覚めたなんてことも……。教育現場の大変さは昔も同じでしたから、昔は良かったなどは全く思いませんが、現在の日本社会で、「評価」「判定」「自己責任」といった言葉が一人歩きし、人の人生、生命まで支配する程の力を持ち、刃を振り回

すようになるとは思いませんでした。今の学校や社会が昔に比べて悪くなったとしたら、その責任は小さな子どもや若者にあるのではなく間違いなく大人の側にあります。

黒一色の就活スーツで武装し(させられ)自己責任という重石をおわされ、他人に助けを求める手も出せず、つまらない人物評価に脅かさねながら、疲れ切った自分の体の痛みを押し隠し、絶望と死の

一歩手前で何とか踏み止まっている……。こんな状況にある若い先生方に「お前が悪い、もつとがんばれ！」などと口が裂けても言いたくない。通知票の励ましの言葉が全員「明るく元気です。」になっしまつてもOK、ネチネチと欠点を並べたてられるより親はずっと安心します。あれもダメ、これも不十分と若い先生を減点法でジャッジするのは止めて、「今日のこと」は忘れて、家に帰ったらおいしい物でも食べてゆっくり休んで、明また元気な顔で出ておいで！」と背中を撫でてあげたいです。他人の評価を気にして自分の株を上げることばかり考えていると、つまらない空虚な人間になってしまいう。こんな親や教師を感受性の鋭い子はすぐ見抜いてしまいます。失敗しても、格好悪くても、自分という人間の全人格をかけて子どもと向かい合うほうが絶対おもしろいはず。子どもという圧倒的な存在は荒々しくも優しい自然そのものだから……。

他人や社会のモノサシに心を奪われ、誰のものでもない自分自身の肉体や精神、自我を手放してしまわぬよう「自分を大切に」して下さいね。

(主婦)

3、こんな学校 こんな教師に

明日、子どもたちと会うのが楽しみです

—信頼、そして授業づくりを楽しむ学校—

高橋 達郎

1 小学校教師は、「アマチュア」

11月から、国語の連続講座を始めた。私は、場所と時間を考えて「10人越えればいいかな」と思いながら資料を印刷したが、予想に反し、席も資料も足りない事態となった。1回目は、37名の参加、2回目と3回目は40名を越えた。20代の若い教師から50代の教師まで。私には、良い授業をしたいという先生方の思いが伝わってきた。

小学校の学級担任は、「アマチュア」だ。なぜなら、同じ教材・教育内容を10回も教えたことがない場合がほとんどだからだ。プロといわれている人は、同じことを何百回、何千回と行っていることだろう。私は教員歴30年を過ぎたが、小学校2年生を1度も担任していない。もし2年生を担任すれば、かけ算九九を初めて教えることになる。自作教具・教材もない。どこでつまづくかの見通しもない。一番多く担任した6年生でもたった9回。しかも、国語科などは、教科書が代わり教材文が違っている。音楽などは教える楽曲が違っている。授業をするためには教材研究がどうしても必要になる。

小学校学級担任は、国語、算数、社会、理科、体育、

保健、図工、音楽、家庭、総合、道徳、学級活動、クラブ、委員会、そして、来年度からの英語活動の必修化、さらに、各行事の指導をしなければならない。情報教育（コンピュータ）、福祉教育、環境教育など「〇〇教育」とよばれる各種教育も計画されている。さらに宮城県独自の「志教育」なるものの計画作成が命じられ来年度から実施されようとしている。

小学校学級担任はざっと計算して学年平均1000単元・教材を指導する。つまり、小学1年から6年まで合計すれば、600を越える異なる内容を理解し子どもたちに指導しなければならないのだ。だから、小学校学級担任は、教材研究・授業準備の時間が絶対に必要だ。そこが毎年、同じ教科・教材を複数クラスに指導する中学・高校の教員と大きく違う点だ。しかし、このことを理解し、問題にし、発言している研究者・教育行政担当者は、ほとんどいない。このことを問題にしている論文・議論に出会ったことがない。学校現場を混乱させる「教育改革」もこのことは全く考慮されていない。

小学校学級担任は、朝、学校に出勤し教室に行く、休み時間5分から10分で、次の授業へと進まなければ

ならない。授業が終わって子どもを帰してほっとするともう4時過ぎ。身も心もくたくたになって帰る日々が続く。小学校高学年担任の授業持ち時間は、週28時間。クラブ・委員会を入れると週29時間、1日ほぼ6時間。

中学校教員の持ち授業時数は、週20時間前後、1日4時間。高校は週15時間ぐらいで、1日3時間と聞く。授業のない「空き時間」を使って授業準備や評価、事務作業など様々な仕事ができる。ところが、教材研究・授業準備の時間が一番必要な小学校教員に、授業のない「空き時間」がないのだ。

小学校学級担任は、時間不足で「アマチュア」だ。この認識がない限り、どんな「教育改革」も成功しないし、どんな「優れた教育実践・方法」を学んでも、いくら「研修」を受けてもそれを考え実践する時間・余裕がなく活かせない。教材研究をして、授業を準備して、すぐに評価して……こうすればもつといいことは、分かっているのにできない歯がゆさ、もどかしさ、悔しさ、自己嫌悪、そして、あきらめへ……。

2 県教育委員会の「学校づくり」

県教育委員会は、昨年度から、「給与構造改革」と称して、教職員の「士気高揚」と「学校組織の活性化」を目的に、定期昇給を止め、従来の給与表を各号俸を4分割に細分化し、査定昇給制度を始めた。

各小中学校では、教頭が1次評価者、校長2次評価者となり、県教育委員会から示された評価項目に基づき、教職員を1項目5点で10項目50点満点で点数をつける。45点以上「A」、40点以上「B」、2点か1点の評価項目が半数以上「D」、1点の評価項目が半数以上「E」と5段階評価し、その上で校内順位をつけ、12月1日付で地教委教育長に報告する。校長だけは、地教委教育長が、同様に点数・順位を付ける。

地教委教育長は、各学校から出された名簿・点数をもとに、小中も職種（教頭、教諭、養護教諭）も関係なく、地教委内で順番をつけ（同点でも、教育長判断で順番をつける）、教育事務所に報告する。教育事務所でも順番を付け、県教委・教職員課長に報告する。

県教委の示した「教諭」の評価項目の具体的な基準には、「校長、教頭の指示等を迅速かつ正確に理解」「校長、教頭、主幹教諭等への報告や相談が的確で」「校長等の指導を仰ぎながら」「課せられた期限内に」などの言葉が並んでいる。驚くことは、学級担任の本務・仕事である教科指導→授業評価が、50点満点であった5点という配点。私が許せないのは、校長、教育長に、無理矢理「順番」を付けさせること。学校という職場、教育という仕事をどう考えているのか。

2010年3月に県教委が発表した『学校マネジメント報告』の調査結果は衝撃だ。「これからの教員生活に希望をもっている」というアンケート項目で、「どう思わない」「どちらかといえばそう思わない」が30歳まで18.7%、31～40歳38.0%、41～50歳42.4%、51～60歳51.2%。現在の小中学校を支えている40代50代の教員の半数が希望を持っていないのである。子どもたちに希望を語るべき教員が希望を失っている。これこそが教育の危機ではないか。だれが教員から希望を奪ってきたのか！

表彰と順番とお金で、教員の「士気」は高められない。教員は良い授業をしたのだ、子どもとの良い関係を求めているのだ。それなのに、時間も予算も与えず「資質向上」「指導力向上」を叫び、教員の誇りを傷つける教育行政。

3 信頼関係の中でこそ

先日、新任の角田小学校で同学年だった先生に会った。その先生は、現在、大規模校の校長先生で今年

度で退職。校長室で当時の話になった。

「達ちゃん、覚えてる？ 達ちゃんが研究授業して、指導案の半分しか行かなかったときがあったの。そして、次の日、昨日の続きをやるから、見に来てくたさい、といってきたの。それで、見に行つた。そして、次の日もまた、見てくたさいと。3日連続。さすがに私も教室を開けられなくて、3日目はいけなかつたけど……。あの頃の角田小は、活気があつたよね。」

3日連続で授業を見てもらったことは、記憶には覚えている。同学年では、同じ場面を別のクラスでやるのを見合せて考え合っていた。当時校内研究で、国語に取り組んでいた。研究2年目の国語部長は、同学年だった女性の先生。研究授業のたびに、授業記録をまとめ、成果と課題を出してくれた。また、自分で授業をして私たち若い教員に見せてくれた。そして、なんとその年の国語部の研究のまとめを私に任せただのだ。新任5年目の私は、期待に応えたいと、研究の成果、説明文と物語の読み取りの違いなどを明らかにし文章化した。そして、翌年にはほとんどが先輩教師の中で私が国語部の部長となり、本・雑誌を読み、勉強し、資料提供と研究授業で問題提起を行った。

今、私の国語の授業、特に説明文の授業は、このときの学びが役に立っている。また、物語もこの研究で感じた発問の問題点と児童の「代理問」としての発問の研究、そして、現在、私が追究している「教師の発問なしで、子どもの疑問、読み取りを中心とする授業」につながっている。若い私を信頼してくれた角田小学校。

当時、角田小学校は、児童数1200名をこえ、1学年5クラス、1学級45名のマンモス校だった。私は、学年主任・同僚に恵まれていた。この国語の授業

をはじめ、「火おこし」「はたおり」「日刊の学級便り」（当時300号を越えた）など、私の財産の多くは、この角田小から出発している。学年主任や同僚が私の提案を受け止め支えてくれた。

次の越河小学校でも、国語の研究を続けると共に、「鯉のぼり運動会」「フロア形式の卒業式」などの新しい試みを始めた（現在も続いている）。

「鯉のぼり運動会」。体育主任になった私は5月の運動会を日の丸・万国旗よりも親の願いがこもっている鯉のぼりでいっばいにしたかった。どうするか、予算はない。PTAに相談。校庭にポールを立ててもらおう。泳がせるか、ロープはどうするか。どうつなぐか。次々に課題が出てくる。それをみんなで解決。なんと児童数を超える200本もの鯉のぼりが集まり、大成功。たくさん鯉のぼりが青空で泳ぐ中の運動会、忘れられない。

そして、フロア形式の卒業式。校長先生は「みんなで成功させよう」といつてくれた。誰もやったことがない。椅子を並べてみる。ステージの上に卒業生が並ぶ。合唱は大丈夫か。卒業生が見る正面はどうするか。金物屋に行つてワイヤーロープを買って来て、会場をつくる。そして当日、在校生、教職員、保護者に囲まれた中で、卒業生一人一人が卒業スピーチ。親たちの涙……。信頼されたら期待に応えなくてはならない。

4 小学校で「空き時間」実現

来年度から、小学校で新しい学習指導要領に基づく新教育課程が始まる。結局、6日分の教育内容に戻すべて5時間授業、2年生から6時間授業になる。4年生以上はクラブ活動などを入れると週4日が6時間。



この新教育課程を審議した中央審議会も、今まで以上に「子どもと向き合う時間の確保」「きめ細かな指導」ができるように「教育条件の整備」を答申に盛り込んだ。しかし、その条件は、整備されていない。

文科省は、過去に「1時間の授業に1時間の教材研究・授業準備が必要」と国会で答弁している。しかし、それは現在の学校現場で全く意識されていない。来年度、教科内容と授業時数が増加されるが、そのため教材研究・授業準備の時間は逆に減り、授業の質はさらに低下するだろう。「学力テスト体制」も強化され、「詰め込み」が必死だ。

小学校現場で、今すぐにはできないこと。それは、教頭・教務等の学級担任をしてない教員が専科として授業を担当し、学級担任に「空き時間」を作ること。私はここ10数年ずっとそのことを地教委、教育事務所、県教委に求めてきた。その結果、仙南・大河南教育事務所管内では、多くの小学校で、教頭・教務等が専科授業を持ち、学級担任に「空き時間」ができるようになった。

そして、ついに県教委も先に紹介した昨年の「学校マネジメント報告」の中で、「子どもと向き合う時間」を作るために、小学校での取組の第1に「学級を担任しない研究主任、教務主任、教頭の指導力を活かす観点から、積極的に授業を担当するよう努める。」をあげたのだ。「教材研究等の授業準備の時間を確保する」観点が盛り込まれた。教頭・教務等が専科授業を担当し、小学校学級担任の「空き時間」をつくること、これが宮城県内の小学校で常識となること、私の組合役員としてのライフワークだ。

私の前任校白川小で、私は「総合的な学習の時間」の校内研究主任となった。その総合学習の準備の時間確保などで、3年生以上の学級担任の「空き時間」をつくるのが合意され、教務主任でもない私がその調



整をまかされた。教頭先生や教務担当者から、担当できる教科を聞いて、教頭・教務等の専科授業が開始された。3年生以上の学級担任が「空き時間」が初めて実現した。6年生担任となった私は、音楽と理科が専科授業となり、毎日1時間の「空き時間」ができた。「教員になって空き時間初めて」多くの同僚の喜ぶ姿が忘れられない。その時間に授業準備や評価、子どもたちの家庭学習の〇付けや学級便りの作成などの仕事ができた。そして、昼休み、校庭に出て子どもたちと鬼ごっこなどを楽しむことができた。教員生活の中で、子どもたちとの親密さはこの学年が一番だった。

5 笑顔で授業をしたい

今年度、私は15年ぶり、5回目の4年生担任。トラブルが絶えずなかなか落ち着かない。さまざま「問題」が多発し、どうしても「注意」が多くなり、寿命が縮まると思えるクラスだった。その一人のK君が、授業中に私に要求する。「先生、笑顔で授業して！」私も、言いたいことをぐつとこらえ、笑顔を作る。そう、笑顔だ！

つい忘れてしまいたいそうになる日々。授業以外に私が最近した仕事。国際理解・英語活動の計画、生徒指導月例報告、カウンセリング報告、出張伺い書・復命書、自家用車使用簿、研修会へのレポート作成、集

金事務（お金数え、入金、収入伺、支出伺）、出席簿、週案、日直の日誌・校内巡視、職員会議への提案、指導主事訪問・研究授業の指導案づくり、校外学習の計画書・報告書、行事への準備、クラブ、委員会の指導などなど。

6時間授業して子どもを帰して3時半、退勤の4時45分には、絶対に終わらない仕事量。学級担任として、他にテストの〇付け、習字の朱書き、作文の評価、図工の作品の評価などが山のようにある。どうしても、教材研究・授業の準備が不十分になりがち。

しかし、私は踏ん張って、毎日、授業の合間、昼の15分の休憩時間などに子どものノートを3種類見て赤ペンを入れる。その日に返す家庭学習ノート、帰りに書いていく学習日記、そして、国語のノート。ずいぶん考え、書くようになったものだ。子どもの成長が、ちよつとした一言がうれしい。そして、自宅で明日の授業の準備、学級便り書きなど。

明日は、授業参観。国語の「一つの花」の授業。この子どもたちも、ようやく落ち着きはじめ、国語の授業を中心に「聞き合い」「学び合い」ができるようになってきた。授業参観では、戦争に行くお父さん、見送るお母さんの心情を考え合う予定。楽しみだ。

私が求める理想の学校。それは「信頼」。教職員への信頼と子どもたちへの信頼、親たちへの信頼に支えられている学校。そして、何より、先生方で学び合い、授業づくりを楽しむ学校。今までの指導経験やアイデアなどを伝え合う職員室。地域を回り、子どもを考え、授業の構想をし準備する。「明日、子どもたちと会おうのが楽しみ」と思って帰宅する学級担任。

1日の持ち授業時数4時間にできないか。笑顔で授業をできる教師、子どもと共に生きる教師であり続けたい。

（白石・大鷹沢小）